

ヘーゲルにおける自然の他在性と自然美

野尻有香（早稲田大学）

ヘーゲルが『美学講義』（ホトー編纂、1835-38年）において、理想的な美とは芸術美であるとし、それゆえ美学の考察対象を芸術にしぼり、自然をその対象から外したことはよく知られている。本発表では、自然が美学の考察対象とならなかった理由を探るべく、1820-21年のベルリン大学におけるヘーゲルの美学講義録、及び『自然哲学』を手がかりに、理念の他在（Anderssein）という自然の性格のもとで自然美を不完全な美とみなした彼の思考方法の内実を明らかにしたい。

ヘーゲルは美を「絶対的な理念がそれ自身においてふさわしい現れをしたもの」と定義するが、もとより絶対理念とは「何がまことの真理であるかを自分自身から規定していく普遍的で無限な絶対精神」のことである。そして絶対精神とは彼の体系において芸術・宗教・哲学である。それゆえ彼が理想とする美は芸術美において現れることとなる。他方、自然は、彼によれば完成された絶対精神のように自ら真理を規定していくものではない。このため、自然美は芸術美と比べるとはなはだ不完全で不十分な美であるとみなされたのである。このことは、『判断力批判』（1790年）において芸術美よりも自然美のほうをその「道徳的感情に類似した」点から優位なものとしたカントと対照的である。

しかしながら、自然美がヘーゲルの考察対象から完全に排除されていたわけではない。『美学講義』において彼は「理念の第一の存在は自然であり、第一の美は自然の美しさ」だとして、芸術美の詳細な考察に入る前に自然美について論じている。なるほど彼にとって理想美は芸術美であり、自然美は欠陥を含むという考えが揺らぐことはない。自然美が欠陥をもつことの主たる理由に、自然の外面性、さらには理念の他在としての自然の性格が挙げられる。

自然の外面性とは以下のことを指す。たとえばある植物において、その葉や花の構造は外部からの影響を受けずにそれら自身の内在的なものによって規定されており、またその構造の内部で調和をもつ側面に鑑みれば植物も生きているものとして美しい。しかしながら、他の生命体との関係性の中に入ると、自然物は外からの影響を受け、ときには傷つけられるが自分自身で完全に復元する力をもたない。他からの影響を受けても自らを規定していく自律性を自然はもたず、その理念を他に依存し制限されているという側面をもつのである。この自然の外面性は、イェナ期、及びエンツェクロペディーにおける『自然哲学』で繰り返し主張されている理念の他在という自然のテーゼと関連するものである。自然美の不完全性は、こうした自然の他在性と連関している。それゆえ、ヘーゲル美学では自然美は芸術美よりも低次なものとされたという理解にとどまるのではなく、なぜ彼がこうした自然美の理解に至ったのかを捉え直すことは、彼の理想美に関してのみならず、ヘーゲルの哲学体系全体の理論の一端の理解に資するものだと言える。